



## 一貫コース通信

## サイエンス的思考の進め

月日の流れは速いモノで東日本大震災から10年の月日が流れた。昔の人の感覚は妙に本質を言い得ていて、 $365日 \times 10年 + 2日$  (うるう年相当日)  $\div 3652日$  の時の流れを、一昔 (ひとむかし) と言った。思うに、万事が万事、10年も経てばそれは昔の事なのだ…と、自分に言い聞かせる様に。事が大きな災害の場合は、ヒトとは言え動物の本能に因る危険回避作用の一つ、“恐怖”で共通認識に至るのだと思う。しかし、この恐怖ですら幾ら自分で努力しても、分散し、希薄化して行く記憶に留め置く事は難しい。その落とし処(所)として、“ひと昔”と言う事なのだろう。

今から約2000年前のローマ帝国に生きた、ユリウス・カエサル(シーザー)は、ヒトの事を“人間ならば誰にでも現実のすべてが見えている訳ではない。多くの人は、見たいと欲する現実しか見ていない”と記した。これを、1500年の後に、ニコロ・マキアベリが掘り起こし、彼にして、全くの真実であるとノートに付記させている。

私は、本来ヒトは誰でも曖昧な記憶を持ち、自分が欲する観念の中で生きて居るのだと考える。見方に因っては、自分に取って都合の良い世界にじっと閉じこもったままで居るのかも知れない。従って、この事に気づき、自覚を持たなければ、外界から新しいモノを受け入れる事は難しいと思うのだ。何故なら、今のままでも困る事は無いからである。それでは、私達に取って気づきの機会とは一体どの様な時なのだろうか？ その一つが残念ながら、災害だと思われる。避けられない事態に遭遇し、やっと鈍麻した感覚が覚醒する。そこで、初めて反省を巡らせるのが一般的に見られる光景だ。この10年足らずの間に大震災とコロナ禍の2つの災害を経験したが、その時、成し得た事は、被害に対する何らかの理由付けと、自分に対する自省の念の2つである。

私は、若い時分に科学の分野を学ぶ事を選んだ。その事で一時期、考える事や観る対象の多くが、このジャンルに偏った。しかし、集中して向き合った事で、サイエンス的思考が幾分か身に付いたのだと思う。蛇足ではあるが、科学は定理や概念に基づくので、説得力と言う意味でこれ以上のモノは見当たらない。対象が自然なら範疇内だし、それ以外の分野に対しても、サイエンス的思考は威力を発揮する。何故なら、論理に則り思考を進めるからだ。例えば、芸術分野は、歴史を辿れば少し前に分化した領域だと理解できるし、味わうや、感じる等の感覚に因るモノも、既に包括していると私は考える。だからと言って、万能ではない。しかし、興味関心の対象外の事でも、大体に於いて論理的に思考を巡らせれば一定以上の理解に辿り着けると思う。

私は、科学的センスを身に付けた事で、随分と得をし、視界も広がったと思う。また、この事で、毎日起こる様々な事象の多くが、自分と全く無関係ではないと思えるのだ。

